

漢方医学簡易年表

前三〇〇頃 伝説時代 黄帝、神農等

前 五〇〇頃 扁鵲の活躍時代

前 二〇二 前漢建国

『黄帝内経』原型成立

二五 後漢建国

『神農本草経』

二〇五頃 張仲景『傷寒雜病論』十六卷

二六五 武帝 晋建国

晋 王叔和『傷寒論』整理編集

六〇一 隋 巢元方『諸病源候論』

六一八 唐建国

六五〇 孫思邈『千金方』『千金翼方』

七〇一 日本 大宝律令医疾令

七五三 王燾『外台秘要』

九八四 日本 丹波康頼「医心方」

九六〇 宋建国

一〇六五 宋版『傷寒論』『金匱要略』発刊

一一四四 金 成無己『註解傷寒論』十卷

一三八〇頃 日本 金元医学の導入

一五三二頃 足利学校の田代三喜 → 曲直瀬道三

一五七八 明 李時珍『本草綱目』

一五九九 明 趙開美「仲景全書」刊行

一六四四 清中国支配 『傷寒論』研究流行

日本 古方派隆盛 医界の主流となる

春秋戦国

前漢

後漢

五代

隋

唐

宋

金

元

明

清

縄文

弥生

古墳

大和朝廷

奈良

平安

平氏

鎌倉

室町

戦国

江戸

ローマ共和国

ローマ帝国

東ローマ帝国

神聖ローマ帝国

オスマントルコ帝国

『傷寒論』の整理、編集、刊行に貢献した人々

王叔和（三世紀）

西晋の著名医家、太医令。古代脈学を系統化した「脉經」の作者。『傷寒論』の整理編集に当たり、『傷寒論』の最古のテキスト作成。

林億（一一世紀）

北宋の医家。北宋政府設立の「校正医書局」の責任者の一人で、十余年かけて『素問』『靈枢』『難經』『傷寒論』『金匱要略』『脉経』『諸病源候論』『千金方』『千金翼方』『外台秘要』等の古医書の校訂、刊行事業を完成させた。この傷寒論を『宋版傷寒論』と称す。

成無己（一二世紀）

金代の医家。『内経』『難經』等の古医書の理論により『傷寒論』を研究。『注解傷寒論』一〇巻は現存する最古の『傷寒論』の全面的な注解書である。その他「傷寒明理論」「傷寒論方」などで後世の『傷寒論』研究に多大の影響を与えた。

趙開美（一六世紀）

明時代の官僚で蔵書家。一五九九年「仲景全書」を刊行。

現在『宋版傷寒論』の現物は一冊も現存していないが「仲景全書」に復刻された『傷寒論』が『宋版傷寒論』の内容を最も忠実に伝えていていると考えられるので、現在これが『趙開美本宋版傷寒論』として『宋版傷寒論』の正式テキストになっている。

歴代『傷寒論』研究を発展させた人々

黄煌 著 「中医伝統流派の系譜」より

通俗傷寒派

北宋時代に成立し明清年間に発展した広義の傷寒即ち外感熱病の弁証論治体系を構築した。理論より臨床の弁証論治能力を重視。

朱肱 宋時代の医家。「類証活人書」二十卷。

俞根初 清時代乾隆・嘉慶年間の名医。「通俗傷寒論」。

弁証傷寒派

『傷寒論』を単に外感熱病治療の専門書とするのではなく、内傷雜病もまた『傷寒論』の理論と薬方によって治療できると主張した。

方有執（一五二二〜？）清時代の医家。「傷寒論条弁」。

舒馳遠 清朝雍正・乾隆年間の名医。六経弁証を強調「傷寒集注」。

柯琴（一六六二〜一七三五）清代。「傷寒来蘇集」八巻中の「傷寒論注」の中で始めて処方名を証の名称とし、方証名を各篇の表題として原文に付け加えた。

經典傷寒派

清朝末期より中華民國時代初期、流行の温病学説を否定し、『傷寒論』こそが外感熱病を治療する基礎であると主張し実践した。

陸九芝 清朝末期に活躍、「世補齋医書」。温病は陽明病と主張、仲景方を主体として臨床治療を行い、清熱法が得意であった。

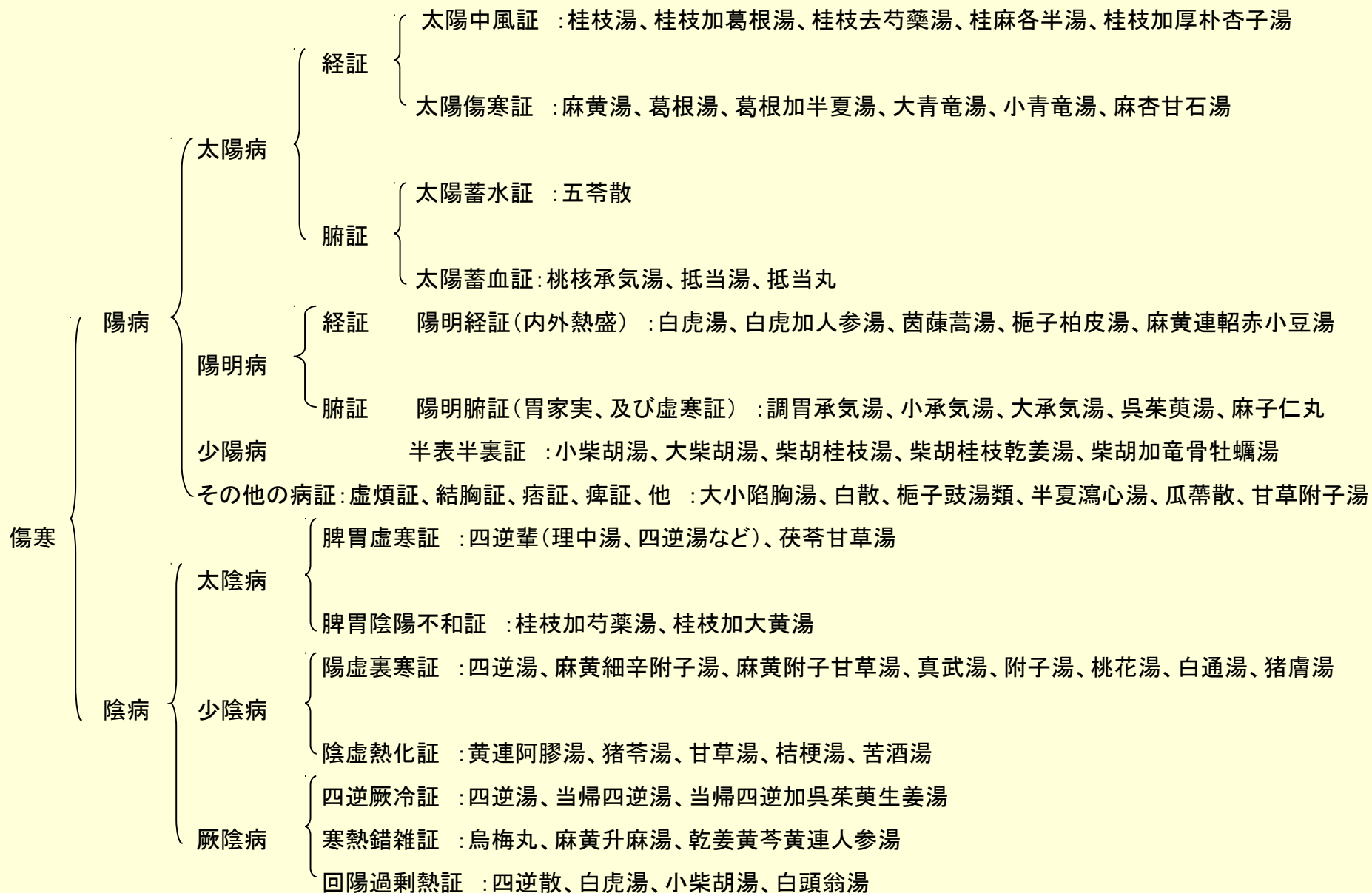
傷寒六經の特質(陽病期)

	病気	特徴	病態	舌証	脈証	腹証	治療原則	主な処方
陽病	太陽病	表証	虚	正常	浮緩	特別な 腹証は ない	辛温解表 (発汗解肌)	桂枝湯
		頭痛 発熱 悪寒	実 傷寒	時に 少紅	浮緊			麻黄湯
病期	陽明病	経証	熱証	紅	洪大	発汗	清熱	白虎加
		腑証 潮熱、 譫語	胃実	乾燥 黄苔	沈実	鞭実満 圧痛 便秘	瀉下	人参湯 調胃、大 承気湯
期	少陽病	半表 半裏	往来寒熱 口苦目眩	淡紅 薄苔	弦脈	胸脇苦満 心下痞鞭	和解	小柴胡湯 大柴胡湯

傷寒六経の特質(陰病期)

病気		特徴	病態	舌証	脉証	腹証	治療原則	主な処方
陰 病 期	太陰病	裏証(消化器に限定) 発熱なし 腹満下痢腹痛	脾陽虚	湿潤 白苔	沈弱	虚満 全体的に軟 いが時に抵 抗圧痛	温裏散寒	人参湯
			裏寒腹痛					桂枝加芍薬湯
	少陰病	裏証(心、腎の衰弱循環障害に及ぶ) 悪心(+) 発熱(-) 下痢、胸苦 四肢厥冷	虚寒証	湿潤 薄白苔	沈微弱	軟弱無力 時に心下痞 や腹皮拘急 圧痛	回陽救逆	四逆湯 真武湯
			虚熱証		沈細数			清虚熱
	厥陰病	裏証(陽虚上熱下寒) 寒熱錯雜 厥逆	寒証 熱証 陰盛亡陽	舌淡、乾、 無苔または薄白苔	沈微細	軟弱無力 胸内苦悶	不定 (臨機応変)	当帰四逆加 呉茱萸生姜湯 麻黄升麻湯

『傷寒論』の六経病(三陰三陽)の構成



傷寒六經と臟腑經絡

傷寒六經の病變は臟腑經絡と対応している。

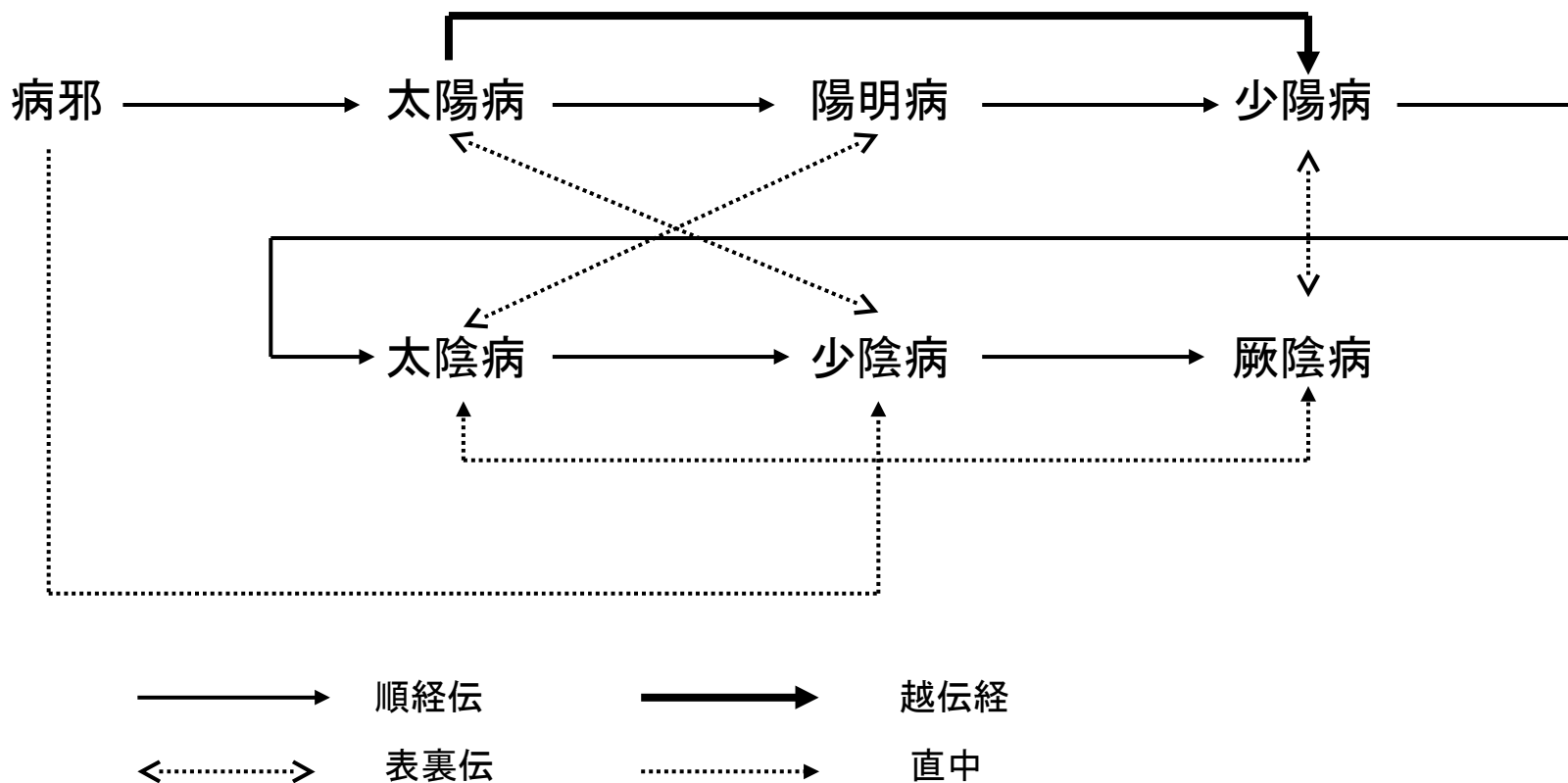
太陽病	膀胱、小腸。足太陽膀胱經、手太陽小腸經	腑・陽經脉
陽明病	胃、大腸。足陽明胃經、手陽明大腸經	
少陽病	胆、三焦。足少陽胆經、手少陽三焦經	
太陰病	脾、肺。足太陰脾經、手太陰肺經	臟・陰經脉
少陰病	腎、心。足少陰腎經、手少陰心經	
厥陰病	肝、心包。足厥陰肝經、手厥陰心包經	

六經の各經はすべて手足二經に別れ合計十二正經である。各經は総て臟腑と連結しており、各臟腑は經脉を介して互いに影響し合い不可分の関係にある。臟腑經絡上も三陽病は陽、三陰病は陰となる。

六經の各病期ではまず所属する臟腑經絡の病理変化が現れる。

六経病の伝変

通常病は表から裏へ、浅から深へと侵入するが、臓腑経絡は互いに連携しているので、病邪は六経の間を自由自在に伝変移行する。



伝 経: 一つの経に入った病邪が別の経に伝わり移動すること。

直 中: 傷寒の邪が表に中らず直接裏に入るもの。

合 病: 二つあるいは三つの経が強い病邪に同時に侵されること。

併 病: 一つの経の病邪の一部が他の経に波及するもの。不完全な伝経である。